

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Various uses of the noun Ga Aru (verb expressing existence) construction in Japanese. Addendum : Observations on the differences between hito-ga aru and hito-ga iru

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, 屋久, 茂子, TAKAHASHI, Tarō, YAHISA, Shigeko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001084

「～がある」の用法

——(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い——

高橋 太郎
屋 久 茂 子

はじめに	2
1. 研究の対象 2. 研究の方法 3. 資料	
第1部 人間・動物以外をあらわすガ格の名詞と組みあわせる「ある」の用法	5
I 空間的な存在	6
1. 空間の示し方 2. ガ格の名詞の種類	
II 範囲・わくぐみの中の存在	9
1. 社会的・心理的な存在 2. 関係的存在	
3. メンバーとしての存在 4. 場所無限定の存在	
5. 付属的存在 6. 慣用的な用法	
II をとりたてた理由	
III おこり・おこなわれとしての存在	14
A. ガ格の名詞と「ある」の組みあわさったものが、一つの事件や行事をあらわす	14
1. 事件・出来事	
イ. 事件 ロ. 「こと」(「コト」ということばが事件をあらわしているもの)	
2. 行事	
3. 連絡・伝達の成立	
4. 状態の存在	
B. 動作・作用をあらわす動詞と、ガ格の名詞と、「ある」の三つが組みあわさって一つの動作・作用をあらわしているもの	16
1. 「こと」 2. 「時」	
IV 所有されるもの・所属するものとしての存在	18
1. 所有されるものごととしての存在	22
(1) もの・財産の存在	23
(2) 他人の自分に対する感情・態度の存在	24
(3) 抽象的な所有物	25
(4) 側面・性質としての存在	26

2.	他に対する働きかけ・かかわりの存在	27
	(1)行為的なもの (2)思考・感情・態度的なもの (3)関係的なもの	
3.	何かをする時間の存在	29
V	経験としての存在	30
第2部	人間・動物をあらわすガ格の名詞と組みあわせる「ある」の用法	32
1.	所有のカテゴリーに属するもの	33
2.	おこり・おこなわれのカテゴリーに近いもの	34
	(1)ガ格の名詞そのものが、事件的ニュアンスをおびているもの	
	(2)ガ格の名詞が動作動詞でかざられているもの	
3.	聞き手のまだ知らない人や動物を登場させて新しい場面を設定する場合	37
	(ガ格名詞の特徴) (場所のしめし方の特徴)	
4.	一定の属性をもった場所に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合	40
5.	場所を限定せず、あるいは、「世間」とか「世の中」というばく然とした広い範囲の中に一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合	40
6.	メンバー全体の中に、別の一定の属性をあわせもったメンバーが存在することをあらわす場合	40
7.	組織体の中に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合	41
	まとめ(表)	42
	補注	42

はじめに

1. 研究の対象

「ある」という動詞は、基本的な動詞であるので、使用例が非常に多い。そして、その使われかたもいろいろである。

- (1) 村には たんぼが ある。
- (2) あした 試験が ある。
- (3) 彼には 財産が ある。

(1)は、一定の空間に、一定のものが存在することをあらわしているが、(2)では、ある事件がおこることをあらわし、(3)では、彼が財産を所有している

ことをあらわしている。このように、使われかたであらわす意味が変わってくる。と同時に「ある」のいろいろな文法的性格も変わってくる。(2)では、「ある」という現在形が未来をあらわす、ということで、動作動詞になっている。(注)

(3)では、

(3) あの方には 財産が おありだ。

となり得るように、人称の統一は、ガ格の名詞と「ある」との間ではなく、もちぬしをあらわす成分と「ある」との間にみられる。

この研究の対象は、このような「ある」のいろいろな使われかたである。

これを、ガ格の名詞との組みあわせで使われているばあいに限って調べた。これに限定したのは、「ガ格の名詞と動詞の組合せ」の研究のために採ったカードを利用した、という偶然にすぎないが、これが「ある」の最も一般的な使われかたであろうと思われる。

つぎに、「ある」と「いる」の違いを考えた。

人間や動物の存在をあらわすのに、「いる」が使われる場合と、「ある」が使われる場合がある。

(4) それとその家^{うち}の女中がそこにいた。(暗234)

(5) Kと私が一所に宅^{うち}にゐる時でも、(こ228)

(6) あるところに爺さんと婆さんがあった。(昔Ⅱ47)

(7) 船首の中甲板へ出て来る一人の男がある。(伸161)

このような「ある」と「いる」の違いもこの研究の対象とした。

2. 研究の方法

(1) 研究対象が細かいこと、複雑なことになればなるほど、自分の考えだけでは片よってしまうので、多くの使用例を集めて、そこから法則をみつけるという形で研究をくんだ。

(2) まず、ガ格の名詞と「ある」との関係、ついで、ニ格の名詞と「ある」との関係がどのようなしくみになっているかということで、カテゴ

(注) 鈴木重幸1965「現代日本語の動詞のテンス」(ことばの研究第2集)12ページ

りに分類した。その場合「ある」および各単語のあらゆる文法的な意味に注目した。(注)

- (3) 文の構造という面から、各カテゴリーの性格を調べた。
- (4) そこに使われた「ある」の形態論的な特徴から各カテゴリーの性格を調べた。
- (5) (2)および(3)では、その各単語の文法的な意味をおさえる過程で、かなりの程度、各単語の語い的な意味を手がかりとした。
- (6) 「ある」の場合、人間・動物以外をあらゆる名詞との組みあわせで使われるもののほうが基本的と考えて、まず、そこからおさえた。
- (7) 人間・動物をあらゆる名詞との組みあわせで使われるものについては、文脈との関連が問題になるので、(2)~(5)のほかにも、文章の構造の観点をいれて分析した。

3. 資料

次の作品の該当するものをすべてぬきだして、

人間・動物以外のガ格+ある……………687
人間・動物のガ格+ある……………138
人間・動物のガ格+いる…………… 91

計 916 例をカード化して、作業した。

				(略号)
志賀直哉「暗夜行路」(前)	(1921)	岩波文庫	1963. 4	(暗)
森 鷗外「阿部一族」	(1913)	〃	1964. 2	(阿)
田山花袋「蒲団」	(1907)	〃	1963. 10	(ふ)
谷崎潤一郎「春琴抄」	(1933)	〃	1963. 5	(春)
芥川龍之介「羅生門」	(1915)	〃	1963. 10	(ラ)
宮本百合子「伸子」(上)	(1926)	〃	1963. 11	(伸)
島崎藤村「破戒」	(1906)	〃	1963. 7	(破)
徳田秋声「あらくれ」	(1915)	〃	1964. 2	(あ)
夏目漱石「こころ」	(1914)	〃	1963. 8	(こ)

(注) 奥田靖雄1962「ニ格の名詞と動詞のくみあわせ」(がり版ざりプリント)を勉強した。(補注) この論文はその後、言語学研究会編1983「日本語文法・連語論(資料編)」(むぎ書房)に収録された。

また、人・動物をあらわす名詞と組みあわさるものについては、さらに次の作品からえらんで、

ある……175

いる…… 60

計 235 枚をつけたした。

関敬吾「こぶとり爺さん・かちかち山」—日本の昔ばなし(I)—
(1956) 岩波文庫1966. 8 (昔I)

〃 「桃太郎・舌きり雀・花さか爺」—日本の昔ばなし(II)—
(1956) 〃 1966. 7 (昔II)

〃 「一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎」—日本の昔ばなし(III)—
(1957) 〃 1966. 4 (昔III)

第1部 人間・動物以外をあらわすガ格の名詞と組みあわさる「ある」の用法

これは、大きくわけて、次のように5つにわけられる。

I 空間的な存在

一定の空間に、一定のものが存在することをあらわす。

(8) 植源の庭には大きな水甕が三つもあった。(あ92)

(9) 茗荷谷に自家があったころ(暗188)

(10) 前に大きな島があつて(暗152)

(11) 庭へはいろいろとする所に屋根のついた小さな門がある。(暗180)

おもな特徴は、その存在する空間(存在場所)が、文中、または文脈で示されていること。

II 範囲・わくぐみの中の存在

一定の範囲・わくぐみの中に、一定の抽象的なものが存在することをあらわす。

(12) 江戸時代には、士・農・工・商の四つの階級がありました。(資料外)

(13) なに、そんな事があるもんですか。(あ56)

(14) 呼びかけと、彼女の応答とに間があったので、(伸113)

(15) 良き驚を獲ることは容易にあらず、獲れば授業料の儲があるので、(春177)

これらは、存在するものの性格にしたがって、存在するわくぐみの性格も

変る。存在場所が抽象的である。

III おこり・おこなわれとしての存在（事件・催しとしての存在）

ガ格の名詞と「ある」が組みあわさって、ある事件がおこることや、ある行事がおこなわれることをあらわす。

- (16) 其前の晩、烈しい夫婦喧嘩があって、(破318)
- (17) 今度のやうなことが有ると、(破252)
- (18) きょう四時から東海寺で先祖の法事があるんだが、(暗97)
- (19) 一日置いて今夜の六時に新橋に着くといふ電報があった。(ふ43)

ここでは、「ある」が動作動詞的ニュアンスをもつ。状況語として時を示す語が出てくる。

IV 所有されるもの・所属するものとしての存在

- (20) 宅には相当の財産があったので、(こ154)
- (21) 佐々さん、あなたこれから時間がありますか。(伸95)
- (22) この机には、あしが四本ある。(資料外)
- (23) 何んですか、私に用事があると仰るのは。(破24)
- (24) 西鶴には、変な凶太さがある。(暗255)

ガ格の名詞は、人や物事に所有されているものや、所属しているものをあらわしている。もちぬしが主語的要素を持つてくる。

V 経験としての存在

過去にそういうことをした経験をもっていることをあらわす。

- (25) 君は恋をした事がありますか。(こ35)
- (26) お島は養家を出てから、一二度こゝへも顔出しをしたことがあったが、(あ138)
- (27) 奥さんは「一略一」と答へた事があった。(こ88)

「～したことが」と「ある」の組みあわせで、過去における一つの動作をあらわしている。それが特定の人や物とかかわるという所有の関係になって存在していることをあらわす。

I 空間的な存在

一定の場所に、一定のものが存在することをあらわす。

- (28) この千光寺にある玉の岩のてっぺんに昔光る珠があって、(暗156)

- (29) 卒業生の写真が学校に有りますがね, (破43)
- (30) ある町かどに洋酒洋食品を売る軒の低い, しかしわりに品物の充実した店があった。(暗177)
- (31) 前の空地に一本大きな冬枯れの樹木があった。(伸80)
- (32) 右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があった。(伸12)
- (33) おいしい蒸羊羹があるよ。(伸172)
- (34) 何方の御墓があるんですか。(こ16)
- (35) 前に往來の頻繁な道路があつて, (ふ13)
- (36) 何か君のところには彼の先生のものがあるだらう。(破215)
- (37) 其の証拠になる手紙があるだらう, 其の身の潔白を証する為めに其の前後の手紙を見せ給へと迫つた。(ふ71)
- (38) 火鉢に火があるかと尋ねると, (こ209)

これらは「ある」が独立で、存在動詞として働いている。テンスにあらわれる性格からみると、この「ある」は状態動詞である。また、その存在する空間が文中、または、文脈で示されている。

1. 空間の示しかた

存在する空間の示しかたには次のようなものがある。

(1) 存在空間が二格で示されているもの

この二格で示されているものには、目の前の場所もあれば、地名をもった広い場所もある。

- (39) 本箱が一閑張の机の傍にあつて, (ふ13)
- (40) 其の上には、鏡と、紅皿と、白粉の壘と、今一つシュウソカリが入つた大きな壘がある。(ふ13)
- (41) その下には丈の高い石の頂を掘り窪めた手水鉢がある。(阿35)
- (42) それ、此処に小さなお墓があるでせうと, (春136)
- (43) 丁度其所に誕生寺といふ寺がありました。(こ222)
- (44) 今、階下にアルマがあつたわ。(暗58)
- (45) 羅生門が、朱雀大路にある以上, (ラ6)
- (46) 田町の方に、こんな家があるんですがね。(あ147)
- (47) 大井の山王寄りに一軒建ての二階家があつた。(暗243)

(2) 状況語的成分で場所を示しているもの

「～いくと」等で場所を具体的にしている。

- 48 上の渡しを渡ると休茶屋が有る。(破332)
- 49 右へ少し、幅広い石段を登ると、大きな松の枝におおわれた掛け茶屋があった。(暗156)
- 50 じめじめした細道をはいて行くと、大きな岩にかかえ込まれたような場所に薄暗く建てられた小さな茶室様の一棟があった。(暗157)
- 61 人里を離れて行けば行くほど次第に路は細く、落ち朽ちた木葉を踏みおかに一條の足跡があるばかり。(破109)
- (3) 文中では示されていないが、文脈からわかるもの
- 62 京都の松茸があるから、すぐこっちへ来てください。(暗102)
- 63 「—お湯があるかしら」(伸171)
- 64 荷物と言へば本箱、机、柳行李、それに蒲団の包があるだけで、(破30)
- 65 大きな銀杏があって、ぬれた地面へその黄色い葉が落ち散っていた。(暗117)
- 66 お米が寝しなに時々飲むあまり上等でないシェリーがあった。(暗95)

2. ガ格の名詞の種類

ガ格の名詞で示されるものには、次のようなものがある。

(1) 品物

固定されていない、動き得るもの。

- 67 長椅子や寝台の上には、小綺麗な更紗や小蒲団があって、(伸80)
- 68 しまいにその白銅がどっちの手にあるかわからなくなったところで、(暗34)
- 69 床の横に違ひ棚があって、(こ174)
- 60 もしかするとパリで買うほうが安い物があるかもしれないよ。(暗25)
- 61 余白に記録らしい文字があった。(伸23)

(2) 建造物

建築物（家等）や現場（作業場等）など、特定の場所に固定されていて、物としての側面と場所としての側面を兼ねそなえているもの。

- 62 そこに石造の門口を閉した旅館があったり、(あ106)
- 63 前の島に造船所がある。(暗159)
- 64 行く道にも、ところどころに居心地のよささうな芝生や植込みがあった。(伸52)

63) 市ヶ谷見附の彼方には時雄の妻君の里の家があるのだが, (ふ14)

66) 同じ島の左手の山の中腹に石切り場があって, (暗159)

67) 八階の頂上に寄宿舎の食堂があった。(伸72)

(3) 場所

土地・場所・ところなどで、田畑・公園・島・道路など、一定の位置を持った場所。ただし、「私には行きたい所がある」などは、後に述べる所有の關係にいった。

68) 思ひもかけない山麓の傾斜面に瘦せた田畑があったり, (あ106)

69) 目の下に暗いハドソン河と冬枯れの公園があり, (伸99)

70) 庭の外には、幾十株松を育てゝある土地があったり, (あ33)

71) しばらく行くと左手に高く、二三寸に延びた麦畑があって, (暗155)

72) 瘦せた菜花なたねの咲いてゐるところがあったり, (あ133)

(4) 自然現象

一定の空間に、一定の自然現象として存在する。その意味で具体的であるが、つかまえ難いという点で抽象的な要素をふくんでいる。

73) 実際西向きの窓にはまだ、陽があった。(暗219)

74) 外には、ただ黒洞々たる夜があるばかりである。(ラ16)

75) 彼はまた町特有な何か臭においがあると思った。酔の臭いだ。(暗158)

II 範囲・わくぐみの中の存在

一定の範囲・わくぐみの中に、一定の抽象的なものが存在することをあらわす。

76) 尤も義務年限といふやつが有るんだから, (破187)

77) けれども其の表情の中には判然云へない様な一種の曇曇りがあった。(こ15)

78) 始めて世の中に美しいものがある事実を発見した時には, (こ165)

79) 値遇ちごうを得た君臣の間に默契默契があって, (阿30)

これらは、存在するものの性格にしたがって、存在するわくぐみの性格を異にする。

存在のしかたによって、次のように分けられる。

1. 社会的・心理的な存在

一定の社会に、または一定の人間の周辺に、社会的または心理的な現象・

法則として存在することをあらわす。

- ㉚ 昔は寒稽古と云って寒中夜のしらしら明けに風に吹き曝されながら稽古するといふ習慣があった。(春154)
- ㉛ よもや其雲のわだかまりが、お志保の上にあらうとは、(破239)
- ㉜ 伸子が望むだけどしどし人生に突入することを許さない掣肘があった。
(伸48)
- ㉝ 家庭の内には陽気な混雑があるばかりであった。(伸186)

また、次のようなものは、一応ここに置いておくと、「関係的存在」と近いもので、はっきり位置づけられないものとしてあげておく。

- ㉞ 二人の間に間違いがあらうとは、(春167)
- ㉟ 値遇を得た君臣の間に默契があって、(阿30)
- ㊱ 何だか行き違ひがあるやうね(伸136)

2. 関係的存在

二つ、あるいはそれ以上のもの間に、それをとりむすぶ関係として存在する。この中には、“へだたり”といえるものと“つながり”といえるものがある。

イ. へだたり

「二つのもの間」という一定の範囲に存在する、時間的・空間的・抽象的にはかることができる（大きい、小さい、長い、短い等といえる）もの。

- ㉚ 此姉とKの間は大分年齒の差があったのです。(こ202)
- ㉛ 西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。(こ287)
- ㉜ 説教の始まるには未だ少許間が有った。(破214)

ロ. つながり

二つのものをとりむすんでいる関係そのもの

- ㉚ 彼放逐された大毒と自分との間には一種の関係があって、(破30)
- ㉛ 古代語の研究と、極めて実利的なY・M・C・Aの仕事との間に、どんな心持の上の必然なつながりがあるのだらう。(伸18)
- ㉜ それにさう云ふ関係があれば中々人前を隠し切れぬもの、(春166)

位置づけのはっきりわからないものがある。IVの2にはいるのかもしれない

い。

- ㊦ 春琴の死後佐助がてる女を唯一の話相手とし折に触れては亡き師匠の思ひ出に耽ったのもそんな関係があるからである。(春206)
- ㊦ 兎も角も一緒に仕事をした文誼が有って見れば、(破339)
- ㊦ 直接と間接の区別があるまで、(こ264)

3. メンバーとしての存在

メンバー全体の中に、一定の属性をもったものが存在する。

- ㊦ 近頃私の手に入れたものに「鵲屋春琴伝」といふ小冊子があり、(春138)
- ㊦ その中には、「昔は親は子に食はせて貰ったのに、今の親は子に食はれる丈だ」などいふ言葉があった。(こ120)
- ㊦ その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。(ラ10)
- ㊦ そのうちにたった一つの例外があった。(こ25)

ここにくるガ格の名詞は必ずしも抽象的ではないが、存在の場所が具体的な空間でなく、その意味で抽象的である。

4. 場所無限定の存在

場所の限定はしないで、あるいは「世間」とか「世の中」とか漠然とした広い範囲に、一定の属性をもった物事として存在する。

- (100) 心の貧しい事ほど、みじめな状態があらうかと思った。(暗251)
- (101) 尾の道より気に入った所があれば彼はどこでもよかった。(暗158)
- (102) 是程悲しい情愛が有りませうか。(破325)
- (103) いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、(こ170)
- (104) そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだらう。(こ115)

この中には、ガ格の名詞が「もの」「こと」「話」であるものが多い。

(1) 「もの」の使われるもの

「もの」という語をなにかでかざることによって、特定性を消して、一般的な属性の面をとりだしている。

- (105) 按ずるに視覚を失った相愛の男女が触覚の世界を楽しむ程度は到底われらの想像を許さぬものがあらう。(春204)
- (106) しかもそれらを彩るたっぷりした釉薬の黄、紫、緑、碧の見覚えある配

- 色に至るまで、寧楽朝の美術を回想させずには置かないものがある。(伸23)
- (107) この感動は何かから来たか。興奮し切った群集心理からも来たろう。しかし何かしらそれだけでないものがあった。(暗114)

(2) 「話」「こと」の使われるもの

出来事や現象などを、「いつ・どこでおこった現実の特定の事件」というとらえ方でなく、一定の属性をもったことがらとしてとらえる。具体的な場所や時を示す状況語がつかない点でⅢとは異なる。「この世に」「どこに」のような語は来得るが、それはもはや具体的な空間ではない。

- (108) それでは一請ふ隗より始めよといふことがございますから、(伸18)
- (109) 積方の親類の人が、信行と同級だった人の妹と結婚する話があって、(暗96)
- (110) 聾者は愚人のやうに見え盲人は賢者のやうに見えるといふ説があった。(春139)
- (111) しかし万一其様なことが有るとすれば、(破226)

5. 付属的存在

あるものごとにくっついて存在することをあらわす。

- (112) いや、この老婆に対すると言っては、語弊があるかもしれない。(ラ12)
- (113) 恋に師弟の別があって堪るものか。(ふ28)
- (114) ものには例外がある。(資料外)
- (115) どうしても調べたものは調べた丈のことが有ります。(破76)
- (116) 頭ごなしに罵らうとして、反って丑松の為に言敗られた気味が有るので(破272)
- (117) 是は書く丈の必要があるから書いたのだが、(こ56)
- (118) ヴィオリンと三味線とはツボに何の印もなく、且演奏の度に絃の調子を整へてかゝる必要があるので、(春153)

これらはⅣに近い。非常に抽象的なので分析がしにくい。あるいはⅣなのかもしれない。

6. 慣用的な用法

今までと比べて、さらにガ格の名詞と「ある」の結びつきが強い。一応ここに入れたが、あるいは別の扱いをしなければならないのかもしれない。

(119) 私は何故だか知らないと挨拶するより外に仕方がありませんでした。

(こ236)

(120) 勘当されても為方が御座いませぬ。(ふ57)

(121) 坐ってゐてそんな事の知れやう筈がありません。(こ187)

(122) 熱心にも程がある (春164)

(123) 僕も亦折角心配した甲斐があるといふもんです。(破303)

〔Ⅱをとりたてた理由〕Ⅱは、組みあわせや文における「ある」の独立性の点からも、その意味（存在性）の点からも、ⅢやⅣと比べて、Ⅰに近い。これをとりだして独立させたのは、次の理由による。

(1) 存在する場所が具体的な空間でないこと

(2) それが、ⅠからⅣへの移行過程にあると考えられること

(3) さらに、人間・動物の場合と比べあわせてみると、Ⅰ的なもの（具体的な空間）には「いる」が圧倒的に多いのに、Ⅱ的なもの（一定の範囲）では「ある」がでてくるという点で、ⅠとⅡの間に、まだほかに何か違いがあるのではないかと考えられること。

なお、(2)に関しては、次のように、ⅡともⅣともとれるような例があることから、これのつながりが考えられる。例~~02030409~~の他に、次のようなものがある。

(124) さうですな。関係があると思はんけりやなりますまい。(ふ71)

(125) 将来もし縁があったら、(ふ67)

この場合、Ⅳの中でも、相手をとるばあいのほうとの関係が強い。ⅡからⅣへ、次のようにならべることができる。

{	<u>AとBとの間に</u> 関係がある。Ⅱ	
	<u>AとBは</u> 関係がある。 ↓	
	<u>AはBと</u> 関係がある。 Ⅳ (相手をとる所有)	

また、前にも記したように、「付属的存在」は、ⅡともⅣともとれるものが多い。

(126) 心配だせばそこまで用心しとく必要があるのかもしれない。(暗226)

(127) そんな事でもして気をかえる必要があるんですよ。(暗135)

(128) 私はある書物に就いて先生に話して貰ふ必要があったので、(こ30)

(129) 又修業に出られる便宜があるので, (こ194)

(130) 利太郎の横恋慕にどの程度の熱意があったか, (春192)

これらは、「——がおありになる」という云い方ができそうである。もちぬしとの関係で「ある」が尊敬語に変れるのはⅣの特徴の一つである。

Ⅲ おこり・おこなわれとしての存在

ガ格の名詞と「ある」が組みあわさって、ある出来事がおこることや、ある催しが行なわれることをあらわす。

(131) 西部の大学にゐた時にも, 何か婦人のことで 面白くない事件があったん
ですってね。(伸82)

(132) 其処に控へてゐた間に座敷の方でどういふ事があったのか, (春190)

(133) けれども其事があつてから後なんです。(こ54)

(134) もしも病人に万一のことが有つたら, (破334)

(135) 丁度その夜, 船では舞踏会があつた。(伸133)

空間的な存在で場所が重要であるように、こちらは「おこる時」があつてはじめて存在する。だから状況語で時を示す語が出ていることが多い。また、「ある」が独立して存在をあらわしているのではなく、「ガ格の名詞」と組みあわさって動作や作用をあらわしている。

A ガ格の名詞と「ある」の組みあわさったものが、一つの事件や行事をあらわしているもの

「ある」は本来、状態動詞であるが、この組みあわせでは、動作動詞として使われる。これは、次のように分類できる。

1. 事件・出来事

ガ格の名詞と「ある」の組みあわせで、一つの事件・出来事が、ある一定の時に発生した(発生する)ことをあらわしている。ガ格の名詞として、「こと」ということばが使われることが多い。おこる場所が対象語的になり、《に格》で示される。

イ. 事件

(136) まあ吾家^{うち}に不幸がごわしたもんだで, (破116) (死人が出た、という一つの事件があつた)

- (137) 汽車に故障がありましてな, (ふ62)
- (138) 養家ではその頃不思議な利得があって, (あ8)
- (139) 朝夕拜んでをりました効があって, (春201) (効いた結果がなにかの形であらわれたこと)
- (140) 先夜伸子の留守中, 不快ないきさつがあってから, (伸183)

ロ。「こと」「こと」ということばが事件をあらわしているもの)

- (141) そんな事があったか否か知らないけれど, (あ99)
- (142) 意外なことが有れば有るものですね。(破126)
- (143) どんな事があっても, 三人でこの店を守立てゝみせるとかんでゐた彼女が, (あ162)
- (144) 若しもの事があつたら, 何時でも呼んで呉れるやうに, (こ146)
- (145) 是は万一の事がある場合でなければ, (こ60)

2. 行事

ガ格の名詞と「ある」が組みあわさって、一つの催しが行なわれることをあらわしている。ガ格の名詞は行事の名まえで、行なわれる場所はデ格で示されていることが多い。

- (146) 三月二十四日には初七日の営みがあった。(阿27)
- (147) ついさっきまで会議があつて, (伸93)
- (148) 五時過に二人はC大学の集会所へ廻つた。Y・M・C・A主催のコスモポリタン倶楽部の日曜晩餐会があつた。(伸111)
- (149) 南洋館というので土人の踊りがある。(暗253)
- (150) 毎日処々に赤十字や戦地慰問のためのバザーがあつた。(伸19)

3. 連絡・伝達の成立

連絡の方法・手段などをあらわすものが、ガ格の名詞としてくると、そういう連絡・伝達が行なわれたことを示す。

- (151) そうその朝・折本という友だちからのたよりがあつた。(暗253)
- (152) 其時私は先生から屹度返事があると母に保証した。(こ128)
- (153) いづれ、其内には沙汰があるだらうと思ふよ。(破187)
- (154) 妹の夫からも立つといふ報知があつた。(こ127)
- (155) 駕籠がやうやう一町ばかり行つた時, 注進があつた。(阿76)
- (156) あの娘の方から逢つて呉れると言伝があつて, (破237)

- (157) ひと月ほど前に永田さんから話があって, (暗72)
- (158) 昨日, 上野図書館で女の見習生が入用だといふ広告がありましたから, (ふ57)
- (159) 君臣の間に黙契があって, お許はなくてもお許があったのと変らぬのである。(阿30)

さらに, 言語行動が行なわれたということを示すことがある。

- (160) もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。(こ243)
- (161) 兼ての広言がある。(阿72)
- (162) それから, 未だ二つ三つ問答がありました。(こ260)
- (163) 又春琴をいたはり過ぎるといふ批難があった時, (春145)
- (164) 又七郎へは, 米田監物が承って組頭谷内藏之允を使者に遣って, 賞詞があった。(阿78)

これらは, カラ格が発信者でニ格が受信者となる。から格で示されているものが, 行為者として, そういう連絡・伝達行為を行なうというニュアンスをもつ場合もある。

4. 状態の存在

動作の連続によって, 一定の状態であることを示す。1～3のすべてにわたって, 行事や出来事がくりかえされると状態になる。

- (165) 第一といふと私と先生の間に書信の往復がたびたびあったやうに思はれるが, (こ62)
- (166) 東京と備中との間に手紙の往復があって, (ふ17)

B 動作・作用をあらわす動詞と, ガ格の名詞と, 「ある」の三つが組みあわさって一つの動作・作用をあらわしているもの

- (167) 病人の寝台の左右に黙って永いあひだ腰かけてゐることがある。(伸59)
- (168) 彼女が泣いた時があるのを知ってる。(資料外)

テンスから見ても両方の動詞が組みあわさって, 一つの時をあらわしている。

また, ガ格の名詞は, 前の動詞に規定されているというより, 形式名詞化して, 前の動詞にくっついているといったほうがよいようである。

また, この組みあわせでは, 動作・作用の状態をあらわすことも多い。

1. 動作や作用を出来事としてあらわす場合

「何がどうなる、どうなった」「だれがどうする、どうした」などということの一つの出来事としてあらわす。この場合、ふつう「～するコトがある」の形をとる。

(169) お島が来てからも、おゆふが物陰で泣いてゐるやうなことが時々あった。

(あ96)

(170) 南洋の島にも雪の降ることがある。(資料外)

(171) 万一選挙人の感情を害するやうなことが有っては、(破158)

Ⅳの「行為的なもの」やⅤの「経験」に似ているが、動作の主体をあらわす部分が「こと」を修飾する動詞句の中にふくまれている点が異なる。

2. 時を媒介にして出来事をあらわす場合

そういうことのあった時(ある時)をあらわすことばが、ガ格の名詞として出てくる。時をⅢの一つとして位置づけたのは、Ⅲは時が非常に大きく関係しているものであることと、「時」を「こと」にいいかえられるということからである。

(172) ある夜、それは宵に曇っていて、夜中から急に晴れ渡った夜があった。

(暗211)

(173) お彼岸が過ぎてからも、大雪の積った日があった。(資料外)

(174) あの作品に、みんなが注目した時があった。(資料外)

また、このⅢおこり・おこなわれとして存在するものが、人の内に存在する所有の関係になったものがⅤの経験になるだろうと考えられるが、その場合、この「時」のつくものをここに置いておくことによって、ⅣとⅤの関係がいつそうはっきりする。

「ある」が反語や仮定に使われると、動詞の動作の現実性(出来事性)が問題になり、規定性が強くなる。この場合、Ⅱの4に近くなる。

(175) よしや日は西から出て東へ入る時があらうとも、(破113)

(176) あゝ猪子といふ男は斯様なものを書いたかと、見て呉れるやうな時があったら、(破133)

(177) 身体の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、何うしても手足の動かせない場合がありませう。(こ234)

また、その時が特定の人との関係を深めるにしたがって、所有・経験に近くなる。次のようなものはその移行過程と考えるとよいように思う。

(178) その鶴さんにもいつか何処かで会ふ機会があるやうな気がしてみた。
(あ203)

(179) もし先輩と二人ぎりに成るやうな場合があったなら、(破123)

(180) ある時別れる場合があるとしても、(暗208)

IV 所有されるもの・所属するものとしての存在

「ある」の基本的な使われかたは、

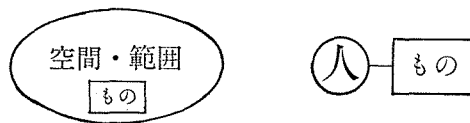
I もの が 空間 にある。

という形をとる。この場合、「ある」は、空間との結びつきが非常に強い。この「空間」が抽象化されて、「範囲」を示すようになると、「ある」の「範囲」との結びつきは弱まってくる。それは、語順の上にもあらわれて、Ⅱでは、次のような語順になる傾向が、Ⅰよりも強くなる。

Ⅱ 範囲 に もの がある。

Ⅰにおいて、空間は、より対象語的であり、Ⅱにおいて、範囲は、より状況語的である。

しかし、図式化すれば、範囲も空間と同じように、わくであらわされるような性質もっている。そして、「ある」はわくの中での存在をあらわしている。ところが、存在範囲が「人」になると、そのわくのような性質が、非常にうすくなる。



Ⅳ₁ 人 に もの がある。

こうなると、「ある」は、ある場所に具体的に存在することよりも、その人に所有されることをあらわす意味が強くなる。

この場合、実際には、「人」に」の形でなく、「人」には」「人」は」の形をとることが多くなる。

IV₂ 彼 には 財産 がある。

IV₃ 彼 は 財産 がある。

このようになると、「人」と「ある」の連語論的な結びつきが弱くなる。

そして、IV₃になれば「人」は状況語的であるというより、主語的であると云える。そのことは、IV₃だけではない。IV₂の型でも、次のような現象がみられる。

IV₄ あの方 には 財産 がおありだ。

この場合、尊敬語の照応する相手は「人」であって、「もの」ではない。そこで、人称の統一性という側面だけからみると、主述関係は「人」と「ある」との間であって、「もの」と「ある」との間にはないということになる(注)。もちろん、このことから、ただちに「人」が主語なのだということとはできないが、少なくとも、主語といえるための条件の一つを、「人」のほうがうけている、ということ是可以する。

「人」がでてきた場合、二格の名詞と「ある」の組みあわせという連語論的な観点だけでは処理しきれなくなる。これは、文論的なものである。この点でIVは、IやIIとは、かなりの程度に異なったものということができよう。

IVのようなものを、IやIIと区別してとりだすことにする。これが、「所有されるもの・所属するものとしての存在」である。つまり、ガ格の名詞で示されたものが、もちぬし(「□」に」「□」には」「□」は」などで示されているもの)に所有されたり、所属したりするものとして存在することをあらわすものである。

(181) けれどもあなたは必竟財産があるからそんな呑気な事を、(こ90)

(182) 非常な財産が有って、道楽に政事でもやって見ようといふ人は格別、

(破189)

(183) 妻の家にも、親子二人位坐ってゐて何うか斯うか暮して行ける財産があ

(注) 鈴木重幸氏「文法について」教育国語4.72ページ

る上に、(こ278)

(184) 私にはもう護り神があるの。(伸85)

以上、もちぬしが人である場合について、説明したが、もちぬしはかならずしも人とは限らない。人でない場合でも、上にあげた「所有されるもの・所属するものとしての存在」の性質をそなえているものは、ここにはいる。

(185) この車は、エンジンが前にあります。(資料外)

(186) 恰も石に霊があつて、(春137)

(187) 意志の力に不足があつた為ではありません。(こ233)

IVに属するものの中には、次の三つの種類がある。

1. 所有されるものごととしての存在

(188) 彼は東京に家がある。(資料外)

(189) サイはハナにツノがある。(資料外)

(190) 佃の声にも、優しさがあつた。(伸93)

2. 他に対する働きかけ・かかわりの存在

(191) おい、君にちょっと話がある。(資料外)

(192) 私は東京から、あの人に少し用事があつて来たものですが、(あ249)

(193) 湿度は温度と関係がある。(資料外)

3. 何かをする時間の存在

(194) 小野田は時々外廻りに歩いて、あとは大抵店で裁をやつてゐたが、^{すき}隙が
ありさえすれば蓄音器を弄^{いじ}つてゐた。(あ235)

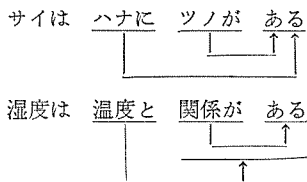
(195) 私は午後なら暇があります。

(196) 彼は機会があつたら、コーランも読んで見る積だと云ひました。(こ197)

1も2も——が——のもちぬしであるという点で同じくIVに属する。しかし、~~~~と——との関係が異なっている。

1 では、~~~~は——のありかであるが、2. では、~~~~は——の向つていく相手である。

さらに、「ある」との関係を見ると、1. では、~~~~は「ある」と直接に結びつくが、2では、まず、——と「ある」が組みあわさつて、それと~~~~とが関係している。このように、文の構造が異なっている。



また、語順をかえるにしても

サイは ツノが ハナに ある

とくらべて、

湿度は 関係が 温度と ある

は、とても不自然である。

さらに、1と2を区別する特徴として、もちぬしをあらわす形式が異なる。1は、「～に」「～には」「～は」などの形があるのに対して、2は、「～は」しかない。さらに、2は、場合によっては、もちぬしをあらわす名詞が「～が」の形であられることもある。

(197) ぜんたいこれが三日も前からあれほどに拘泥^{こうでい}し、あれほどに力こぶを入れて来た事とどうい関係があるのだろうと。(暗56)

こういう点で、2は、1より、さらに主語らしさを強めている。あるいは、2では、もちぬしをあらわす成分は、「～がある」という述語に対する主語である、といえるかもしれない。(注)

3の文では、ありかを示す部分も、相手を示す部分もない。3が、1や2と共通するのは、「～が」と「ある」が組みあわさった形で、もちぬしと関係していることである。3は、テンスの面からみると、Ⅲと同じように、「～が」と「ある」が組みあわさって、「ある」が動作動詞のようにになっている。

2も3も、「ある」は、ありかを示す名詞と組みあわさることはない。しかし、それは、2や3の文に場所を示す成分ははいり得ないということではない。

(注) このことは「～は～が～」という文の形式を研究したうえでないと結論が出せない。

(198) ちょっと外で君に話がある。(資料外)

(199) 家では、子供と遊ぶ時間がある。(資料外)

しかし、この場合、〜は〜の行なわれる場所を示す状況語であって、話や時間のありかを示す対象語ではない。このことは、2や3は、1よりも「〜が」と「ある」の結びつきが強いことを物語っている。

1. 所有されるものごととしての存在

ガ格の名詞で示されたものが、もちぬしに所有されるものとして存在することをあらわす。

ガ格であらわされるものは、財産から性質にいたるまで、非常に広い範囲にわたっている。

(200) 彼には、東京と軽井沢に屋敷がある。(資料外)

(201) 瀬川君はなかなか生徒間に人望が有りますから、(破23)

(202) 自然の作る線、これにはやはり共通の力強さ、美しさがある事に感服した。(暗170)

所有されるものごとの種類によって、単語の組みあわせや、文の成分間の関係に、少しずつ違いがある。そのような小さな違いによって、これを、4つに分類した。

(1) もの・財産の存在

(203) 君のうちに財産があるなら、(こ75)

(2) 他人の自分に対する感情・態度の存在

(204) これでも町ぢや私も信用があったから (あ137)

(3) 抽象的な所有物

(205) 私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに (こ193)

(4) 側面・性質としての存在

(206) 竜岡には昔気質がある (暗26)

これらの4つのどれに位置づけるか迷うものもあるので、あるいは、この分類は無理なのかもしれないが、もしそうであったとしても、1に属する例の範囲を示すという意味は失なわれないと思うので、ここに分類して示すことにする。

(1) もの・財産の存在

これは、所有されるものが最も具体的な場合である。

この場合には、同じ文の中に、もちぬしを示す成分とありかを示す成分とを共存させることができる。(もちろん、これは、共存できるのであって、いつも共存しているわけではない。)また、もちぬしが省略されていることもある。

(207) 彼は、北海道に土地がある。(資料外)

(208) 足があるんだから歩きなさい。(資料外)

もの場合、もちぬしの所有物・所属物・関係先として、もちぬしの外に存在するものもあれば、部分・付属物のような構成物、あるいは、発生・派生物である場合もある。しかし、これらのどれであっても、「ある」の用法という点では違いはないようである。

イ. もちもの

(209) 手荷物があらば持たして呉れと言ひ入れる。(破332)

(210) 御目に懸って御渡ししたいものが御座ます。(破89)

(211) 私には、ハンドバックが一つあるだけだから、それを一つもちます。(資料外)

ロ. 財産

(212) 山と田地が少しある限で、金なんか丸で無いんでせう。(こ73)

(213) 宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、(こ149)

(214) 彼は〇〇銀行に口座がある。(資料外)

ハ. 関係先

(215) 此方ではそれぞれ規定の洋服屋があるから、(あ229)

(216) 私には行きつけの美容院がある。(資料外)

ニ. 部分

(217) 人間に眼と鼻とがあるやうに、(伸87)

(218) 引く足があれば、わしも奥へ這入るが、(阿74)

ホ. 付属物

(219) 厩などがあって、邸が広過ぎるので、(こ172)

(220) 灯のともった切抜き^{きりぬき}万燈^{まんとう}のやうに沢山の窓があり、(伸90)

へ。発生・派生物

(221) ひどく頭痛がするし、熱があるらしい。(伸55)

(222) 酔ったのと疲れがあったのとで、(阿37)

(2) 他人の自分に対する感情・態度の存在

(223) 彼は、若者に人気がある (資料外)

(224) あなたは、上役に信用があるようだから (資料外)

(225) 如何です、同情がありますよ。すぐ仕事が出ましたよ。(あ189)

(201) 瀬川君はなかなか生徒間に人望が有りますから、(破23)

(204) これでも町ちゃ私も信用があったから、(あ137)

これは、(1)に似ているけれども、存在するところが現場でなく、範囲あるものは人である。

ふつう、気持 (対人・対事物感情) というのは、

もちぬし → 対象物

おもに、「に格」で示されているものに対する、もちぬしの気持である。つまり、その気持はもちぬし自身の中に存在するものだから、もちぬしがなくなれば、対象物は存在していても、その気持はなくなってしまう。(これは2で示す)

ここにあげたものは、もちぬしの外に存在する気持である。

もちぬし ← 存在範囲

これは、存在範囲にいる人々のもちぬしに対する気持で、上記とは逆の方向に向けられた気持である。

(201) 瀬川君は 生徒間に 人望が ある。

これの「人望」のもちぬしは、瀬川君である。つまり「人望」は瀬川君に所有されているものであるが、その存在する範囲は、生徒間であって、生徒の瀬川君に対する気持である。それは、生徒間には存在しても、別の範囲としての先生方の間には存在しないかもしれない。だから、たとえ、もちぬしが消えた (死んだ) としても「人望」というものは、存在範囲があるかぎりなくならない。

つまり、「瀬川君は、東京に家がある」というのと同じような面をもっている。

ここに分類されるものの特徴として、次のことがいえる。

1. 存在範囲を示す語がある。

「に格」では主に人間の集団（生徒間・若い層）

「で格」では主に地域的なもの（町・地名）

2. もちぬしが「に格」で示されることはほとんどない。
ふつうの気持の時は、もちぬしと存在範囲が一致しているから、
もちぬしが「に格」で示されることもある。

(226) 彼に 彼女に対する愛があるうちは、(資料外)

(3) 抽象的な所有物

(227) あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか。(こ50)

(228) 伎倆があるか何だか知らんが、まあ大変なもんだ。(あ224)

(229) 顔は仔細があって人には見せない。(春203)

これは、ガ格であらわされる名詞が抽象的なものをあらわしている。

この場合、一般にありがが示されない。

(230) 今度の場合でもお前にはいつもある一つの焦点があって、(暗230)

(231) 御嬢さんの下手な活花を、何うして嬉しがって眺める余裕があるか、
(こ177)

(232) 私の親切には箇人を離れてもっと広い背景があったやうです。(こ282)

(233) 私はあなたに話す事の出来ないある理由があって、他と一所にあすこへ
墓参りには行きたくない。(こ19)

(234) お前阿母から口止されてることがあるだらうが。(あ25)

(235) 何でも私に隠してあらしやる事があるに違いない。(こ277)

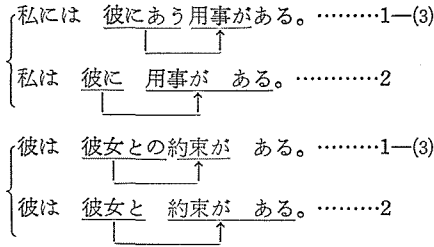
ガ格の名詞が抽象的でも、ありがが示されると、1との違いがはっきりしなくなる。

(236) 何だかKの胸に一物があって、(こ247)

(237) 外の事を考へる丈、胸に空地があるのか知らと疑った。(こ129)

感情・態度・仕事など、対象や相手と関係する名詞は、その文における使

われ方によって、ここになったり、2になったりする。



次のような例は、どちらにはいるのか明きらかでないが、一応ここに入れておく。

- (238) 諸君は何か用が有るんですか。(破313)
- (239) どんな用事があるか知らないけれど。(伸185)
- (240) 彼は自信がある。(資料外)

(4) 側面・性質としての存在

これは、ガ格の名詞が、もちぬしの構成要素を抽象的にぬきだしたものをあらわしている。

- (241) 容色のわるい女はいくら才があっても。(ふ10)
- (242) 何か遅れる能力があるのに、ぶらぶらしてゐるのは詰らん人間に限ると、(こ138)
- (243) 先生は座敷から此櫓の花をよく眺める癖があった。(こ39)
- (244) あれは、特色がある論文だ。(資料外)
- (245) しかしお志保は其程香のある花だ、其程人を嫌ける女らしいところが有るのだ。(破249)
- (246) 私に悪い所があるなら遠慮なく云って下さい。(こ51)

もちぬしが人である場合が多いが、ものであるばあいもある。

- (247) 佃は外套のポケットからかなりの厚みがあるC大学便覧を出して。(伸30)
- (248) 剪った痕を一つ一つ手でさぐって見て少しでも狂ひがあることを許さなかった。(春173)
- (249) 奥さんの語気には非常に同情があった。(こ32)
- (250) まあ商売人に言はせると、冬は冬で、人の知らないところに面白味がある。(破232)
- (251) 荒物のほうはどれも新しく安く、そのわりに趣味があつて。(暗121)

(252) 持主が、隣の酒屋だと云ふその家が、小野田にも望みがありさうに思へた。(あ147)(この「望み」は感情をあらわしているのではなく家の可能性をあらわしている。)

もちぬしが事件である場合、事情や原因などがここにはいる。

(253) この失敗には原因がある。(資料外)

(254) いづれ是には何か疑はれるやうな理由が有ったんでせう。(破265)

(255) 実は一其には他に深い原因が有るんです。(破265)

(256) 然しこゝへ持って来たのは特別の事情がある。(破230)

(257) 生徒の機嫌を取るといふのは、何か其処に訳があるからでせう? (破77)

理由・原因・わけ等のことばがガ格の名詞として使われているものは、もちぬしの違いによって、(3)と(4)に分けられる。

(3)にはいるものは、もちぬしが人であり、人の外に存在している。(205)

(229) (233) などその例、つまり、ここでいう原因・わけ等は、人間の構成物ではない。

しかし、(4)にはいるものは、もちぬしが事件・ことがらで、原因・理由などはことがらを構成する一つの要素として存在している。

(4)において

(258) 彼は、早合点するところに、欠点がある。(資料外)

(259) この建物は、柱を一本もつかっていないところに、特色がある。(資料外)

(260) この実験は、失敗したとこに、意味がある。(資料外)

(261) この事故は、スピードを出しすぎたところに、原因がある。(資料外)

のように、具体的なことがらが「～ところに」で示されると、それが、ありかであると同時に根拠を示すことにもなる。これが(4)の特徴である。(257)の「其処に」も、根拠をあらわしている。

2. 他に対する働きかけ・かかわりの存在

(262) 準教員が囊の中を飛んで来て、生徒一同に用が有るといふ。(破338)

(263) あなたは、その仕事に自信がおりますか。(資料外)

(264) 彼は、彼女と共通点がある。(資料外)

これは、ガ格の名詞と「ある」が組みあわさって、もちぬしが何かに働きかけたり、かかわったりすることをあらわすものである。

この用法では、「ある」はありかを示す単語と組みあわさらず、「～がある」の形で、働きかけやかかわりの対象・相手をあらわす名詞と組みあわせる。

ここに属するものとしては、次のようなものがある。

(1) 行為的なもの

- (265) 一寸友達の処に用があって、(ふ45)
(266) 実は御願ひがあって上りました。(破314)
(267) 「おい、ちょっと話がある」(あ89)
(268) それから少許話すこが有る、と言って生徒一同の顔を眺め渡すと、
(破309)
(269) ところが何か相談したいことが有ると言ふもんだから、(破237)
(270) 私に用事があるというのは、あなたですか？(資料外)

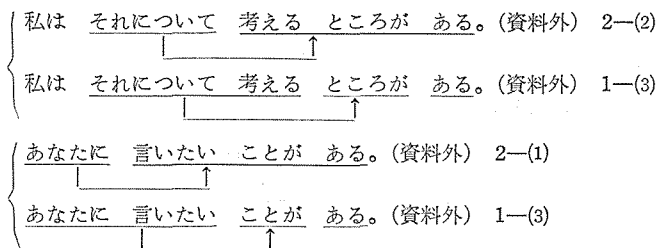
(2) 思考・感情・態度的なもの

- (271) それにもかなり不純な気持があった。(暗65)
(272) 同時に、佃との生活に十分未練があった。(伸133)
(273) 此の姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があっても、何うして遣る訳にも行かなかった。(こ202)
(274) しかし、姫路の白鷺城を見る事も興味があったし、(暗212)
(275) それに道修町の時分にはまだ両親や兄弟達へ気がねがあったけれども、
(春182)
(276) そしてこの事に関しては君にもお考えがあると思いますが、(暗185)
(277) 「実は私すこし思ひ中る事があるんですけども……」「先生があゝ云ふ風になった原因に就いてですか」「ええ」(こ53)

(3) 関係的なもの

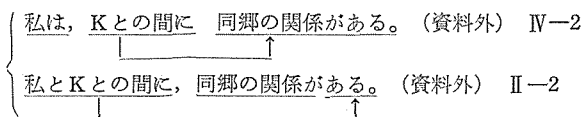
- (278) 其の身と芳子とは盡きざる縁がある。(ふ82)
(279) いつぞや私をお呼びになったのも、そのことに関係がありましたのでせう？(伸108)
(280) 彼は、あの先生と師弟の関係がある。(資料外)

さきへのべたように、この2は、1の(3)と関係が深い。次のような例は、文の構造のとりようによって、どちらにもとれる。



このあたりのことは、文の構造に関する研究が進まないと、解釈できないであろう。

関係的なものは、Ⅱと関係が深い。



3. 何かをする時間の存在

- (281) 佐助は長く悲しみを忘れず天鼓の啼く音を聞く毎に泣き暇があれば仏前に香を薫じて、(春208)
- (282) さればこそ小鳥道楽などに耽ってゐる暇があったのである。(春185)
- (283) きょうは時間がありませんから、それは明日いたします。(資料外)
- (284) 用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞ふだけの余裕があると見えた。(こ89)
- (285) 助命の事を折があったら言上しようと思ったが、(阿58)

「時間がある」という形で、何かをする時間が所有されていることをあらわすものである。

この場合、「ある」は「ありか」を示す単語とは組みあわさらない。

「時間がある」という組みあわせでは、「ある」は動作動詞として働いている。しかし、潜在的用法が多いので、(注) その場合、一見存在動詞のようにみえやすい。

なお、「余裕」は時間的なものとそうでないものがある。時間的でないものは、1の(3)に属する。

(注) 鈴木重幸氏「現代日本語の動詞のテンス」ことばの研究第2集13ページ

- (231) 御嬢さんの下手な活花を、何うして嬉しがって眺める余裕があるか。
(こ177)

V 経験としての存在

「～ことがある」「～経験がある」などの形で、過去にそういうことをした経験をもっていることをあらわすものである。

- (286) ああ、私あすこならいつだったか行ったことがありますよ。(伸14)
(287) あの高等四年の教室で、瀬川といふ教員に習ったことがあった。(破311)
(288) 奥さんは減多に外出した事ありませんでした。(こ181)
(289) お島は其の年の冬の頃、一度青柳と一緒に落会った養母のお伴をしたことがあったが。(あ24)

が格の名詞は、過去の行動や出来事をあらわしているもので、Ⅲとの関係が非常に深い。Ⅲとして存在するものが、特定の間人や物とのかかわりで、所有のような関係になったものが、経験であろう。経験のぬしは「～は」「～には」で示され、とりたてのない「に格」ででることはほとんどない。

「～したことがある」という場合、「こと」は形式名詞であり、動詞を体言化している。そして「～したことが」と「ある」との組みあわせで、一つの動作をあらわしている。

「～したことが ある」という組みあわせにおいて、そのあらわしている時は、過去であり、その持続性は、経験として現在までのこっていることをあらわしている。このテンス・アスペクト的な性格は、一見「～した」の部分と「ある」の部分に分有されているようにも考えられそうである。しかし、そのように考えると

{ ～したことが ある }
{ ～したことが あった }

の二つの形が同じことをあらわしていることを説明することができない。

この組みあわせにおいて、テンスのあらわれ方には、次の4種類がある。

～したことがある。

- (290) 私は寝坊をした結果、日本服の儘急いで学校へ出た事があります。(こ227)
(291) 私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよく一所に散歩した事があります。
(こ273)

(292) 一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事がある。 (こ62)

～したことがあった

(293) 姉は、(中略)妹のそこにあることを意にかげぬらしく、ほっと上気したやうな顔をして言ったことがあったくらいであった。 (あ77)

(294) 何かの拍子で眠れなかった時、病人の唸るやうな声を微かに聞いたと思ひ誤まった私は、夜中に床を抜け出して、父の枕元迄行って見た事があった。 (こ135)

(295) 生徒と一緒に上州の方へ出掛けたことが有りましたっけ。 (破132)

～することがある

(296) 彼は、少し遅くまで寝てゐるやうなことがあると、(あ12)

(297) 彼等は、如何かすると、鼻っ張の強い女主人から頭ごなしに呟鳴りつけられて、ちりちりするやうな事があつても、 (あ79)

～することがあった

(298) 先生は何かの序に、下女を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があった。 (こ25)

(299) 姉は、お島が片づいてからも、ちよいちよい訪ねて来ては、半日も遊んでゐることがあった。 (あ77)

これらの中に入るもので、過去の習慣のようなものがある。これは、(～すると)等の条件のようなものが出て、「よく(しばしば)～することがあった」の形をとることが多い。

(300) 私は夏郷里に帰って、煮え付くやうな蟬の声の中に凝って坐つてゐると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。 (こ121)

(301) おかなは朝来ると、晩方には大抵帰って行つたが、旦那が東京へ用違などに出るをりには、二晩も三晩も帰らないことがあった。 (あ112)

(302) だから實際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。 (こ49)

(303) もと人の妾などをしてゐたと云ふ不幸なその女は、如何かすると二時間も三時間も遊んで帰ることがあった。 (あ235)

「～したことがある」という組みあわせを含む文で、もちぬしをあらわす成分との敬語の統一は、この組みあわせの中の二つの動詞との間に存在する。その強さは、前の動詞のほうが強い。

{あなたは ざらんになったことが ありますか。
{あなたは ざらんになったことが おありですか。

「～したことがある」のように「こと」がでてくることが多いが、「経験」「体験」のような経験をあらわすことばや、「日」「時代」のように、時をあらわすことばが出てくることもある。

- (304) 私は、大学受験に失敗した経験があります。(資料外)
- (305) 彼には、子供をなくした経験がある。(資料外)
- (306) 丑松ととも、一度は斯の参観人と同じ制服を着た時代があった。(破304)
- (307) 二三分のところで平熱にならない日があったり、(伸60)
- (308) お島は一朝でも、洋服で出て行かない日があると、(あ230)

「こと」「経験」「日」などが、形容詞的な成分で規定されることがある。

- (309) それから僕の生涯は、実に種々なことがありましたねえ、(破133)
- (310) あゝ云ふ手曳きならちっとやそっと辛いことがあっても己だって勤める。
(春193)
- (311) 「あゝ君の察して呉れるやうなことがあった。」(破324)
- (312) 長く教員を勤めたものは、皆な斯ういふ経験があるだらうと思ふよ。
(破62)
- (313) 彼も一度は斯ういふ山の風景に無感覚な時代があった。(破122)

この場合も、「ある」のあらわすテンス・アスペクト的な性質が同じであると思われるので、ここに位置づける。

第2部 人間・動物をあらわすガ格の名詞と組みあわさる「ある」の用法

人や動物の存在をあらわすには、「いる」が使われる場合と「ある」が使われる場合がある。「いる」のほうは、語的に「生きて・活動している」という「ある」にはない意味を一面に持っている。だから、人や動物の存在をあらわすのに「いる」が使われるのは、自然だが、「ある」の使われることも多い。

- (314) 本屋の小僧だの客だのが近くにいて (暗93)
- (315) ところがそこには二人の見知らぬ先客があつて、(暗69)
- (316) 左様言つて呉れる人があると難有^{ありがた}い。(破75)
- (317) 後継者があれば二男からは自由じゃないか、(伸192)

(318) あるところに^{いい}爺さまと^{ばあ}婆さまがありました。(昔Ⅰ119)

(319) 唐の果^{から}に^{はて}、どっこいという力もちがあるということだから、(昔Ⅱ231)

「ある」が使われるのは、次のような場合である。

1. 所有のカテゴリーに属するもの

(320) 爺婆に一人の美しい娘がありました。(昔Ⅲ102)

(321) 子供が一人あれば、われたちはどんなにしあわせかわからんがの。(昔Ⅲ25)

2. おこり・おこなわれのカテゴリーに近いもの

(322) 今夜はわしのところには来客があって行かれませぬ。(昔Ⅰ69)

(323) 婆さまがお湯をわかしていると、表^{おもて}でどいどん戸をたたくものがあった。(昔Ⅱ179)

3. 聞き手のまだ知らない人や動物を登場させて、新しい場面を設定する場合

(324) むかし、あるところに一人の男がありました。(昔Ⅲ111)

4. 一定の属性をもった場所に、一定の属性をもった人や動物の存在することをあらわす場合

(325) こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、(ふ9)

5. 場所を限定せず、あるいは「世間」とか「世の中」ということばであらわされるべく然とした広い範囲の中に、一定の属性をあわせもった人や動物が存在することをあらわす場合

(326) アンナのやうな女がもしあったなら、(ふ7)

6. メンバー全体の中に、別の一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合

(327) そのなかに一人まだ若い男があったが、(昔Ⅱ224)

7. 組織体の中に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合

(328) 新左衛門という家にあんにゃ(兄)おじ(弟)三人の若者があった。(昔Ⅲ131)

1. 所有のカテゴリーに属するもの

今の世の中では、人間が人間を所有することはないが、特定の関係を有す

る相手の存在を所有の関係とした。これは、人・動物以外のものと組みあわせる「ある」のIVでのべたような特徴をもっているからである。

ここには、ガ格の名詞として、次のようなものがある。

a. 家族・親族

- (329) お月さまにひとり娘があった。 (昔Ⅲ58)
(330) やすなりにはくずのはという奥方がありました。 (昔Ⅱ40)
(331) わたしには一人の叔母があります。 (昔Ⅰ46)

b. こちらと、そちらの関係があってはじめて成り立つ相手

- (332) 先生がまだ大学にゐる時分、大変仲の好い御友達が一人あったのよ(こ53)
(333) 有力な敵があっても、(ふ34)
(334) 斯ういふ可愛らしい相手があればこそ。(破114)
(335) 買手があるなら自分の一生でも売る。(破136)
(336) 細君も芳子に恋人があるのを知ってから、危険の念、不安の念を全く去った。(ふ39)

c. 行為や感情・思考の相手

- (337) 佃はやがて見舞ふ病人があるからと云って立ち上った。(伸27)
(338) 眞実にわたし憐ういふ人があるんです。(あ246)
(339) 誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。(阿48)

d. 特に取り引きのある人、かかりつけの医者など

- (340) 彼女は、主治医がある、(資料外)

ここにはいるものは、存在の仕方そのものが抽象的なので、存在場所として具体的な場所を必要としない。

文中に具体的な場所を示してあるものも少しはある。

- (341) 国には親類があるから、(昔Ⅱ191)
(342) 根津には君の叔父さんがあると言ったっけね。(破91)

「ある」が使われることのほうが多いが、「いる」が使われることもある。

- (343) わしのところに娘が二人いるが、(昔Ⅰ19)
(344) 貴方にはお秀さんといふ人がゐるぢやありませんか。(あ185)
(345) 竹内数馬の手に島徳右衛門があるやうに、(阿70)

2. おこり・おこなわれの Kategorie に属するもの

これには二種類ある。

(1) ガ格の名詞そのものが、人をあらわすだけでなく、事件的ニュアンスをおびているもの

(346) 今用事の客があるのだが、もう帰るだろう、(暗53)

(347) 伸子は父と、客があつて階下の広間にゐた。(伸29)

(348) たまに宅へお見えになるお客がございましたも、(あ171)

(349) 客があつた時には、決して藁の話をしちやいかんぞ。(昔Ⅱ112)

(350) おかたがええもんださけに 罍がじきにあつた。(昔Ⅲ184)(罍入り)

「客」「迷子」などは「客になる」「客に行く」「迷子になる」などのように、それ自身が事件的ニュアンスをそなえている。

また、場所が示される場合は、ニ格よりデ格が用いられ、時を示す状況語がつくところなども、「法事がある」「試合がある」などと同じである。

さらに「～から来客があつた」などになると、「手紙がある」と同じように、移動動詞性をおびてくる。

これらの「ある」は、「～がある」と組みあわさって、テンスのあらわれ方を見ると、動作動詞と同じ特徴もっていることがみとめられる。

(2) ガ格の名詞が、動作をあらわす動詞でかざられているもの

(351) 夜になつて どどん戸を 叩くもの がありました。(昔Ⅱ217)

(352) そこへ立って 丁寧に 物を尋ねる 一人の紳士 がある。(破115)

(353) 「一郎兄・一郎兄」と呼ぶもの がありました。(昔Ⅰ107)

(354) 時とすると 背後の方から やって来るもの が有つた。破(291)

(355) 扱五月六日 になつたが、まだ 殉死する人 がほつほつ ある。(阿29)

(356) 佃といふのは 洗濯屋だつて 云つた人 がある からさ、(伸115)

(357) 今日一時頃、御免なさいと 玄関に 来た人 がある ですから。(ふ50)

これらの例では「～する・人が・ある」という三つのものが組みあわさつた形で、一つのことからあらわしているといえる。これは「～する・時が・ある」「する・ことが・ある」などと同様に、その「人」「時」「こと」というものの存在を示すというよりも、むしろ全体で事件をあらわしているのである。

テンスをみると、「ある」が独立で、時をあらわすのではなく、カザリ動詞

のテンスとの組みあわせで、時をあらわしている。

(1)(2)を通じて、「ある」の独立性が弱いことも、このカテゴリーの特徴である。

なお、(2)のカザリ動詞はすべて一定時間内におこった（一回かぎりの）現実の動作をあらわしている。

動詞カザリがあっても、それが、性質・状態・経歴・能力など、属性をあらわしている場合は、3以下でのべる種類に属するのであって、ここに属するのではない。

(358) 駿河の安倍郡に大へん節約する男があった。（昔Ⅱ235）

(359) 亭主に死なれて二つになる男の子をかかえて暮している母親がありました。（昔Ⅱ135）

ただし、「あろうか」「あったら」のように、現実性が問題になるような場合は、ここにいれてよいのか、属性を示すものと考えてよいのか、わからないものが出てくる。おそらく、これは中間的なものではないかと思われる。

(360) そげな約束をするものがあるものか。（昔Ⅰ41）

(361) いつまでもまってもええが、物を食わない嫁があったら、世話してくれ。
（昔Ⅰ162）

2に属するものは、具体的な場所（空間）が示されているものが多い。

(362) ほいだら、奥のほうでなんだか音を立てるものがありました。（昔Ⅲ50）

(363) そして、その下の油のキラキラ浮いた水たまりで、顔を洗っている女労働者があった。（暗140）

(364) 時々境内を通り抜けて行く人があった。（暗117）

(365) 人波の間で、（一略一）両手に各国の小旗を振りかざし抜目ない商売をやっている男がある。（伸41）

3以下には、このようなものはない。（2以外で具体的な空間が示されているものは「いる」が使われる。これも、2の特徴である。

また、(1)(2)とも「～がある」や「～する～がある」の組みあわせ全体で事件をあらわしているので、「いる」がつかわれることはない。これも、2の特徴といえる。だから、「いる」が使われた時はもう事件をあらわしているのではなく、その行動を行っているという属性を持った人をあらわしている。

(366) 杖を小脇へはさんで、巻煙草に火をつけている者がいる。(暗138)

3. 聞き手のまだ知らない人や動物を登場させて、新しい場面を設定する場合
典型的なものとして、昔話の冒頭の文の形式がある。

(367) 昔、三人の娘があった。(昔Ⅱ114)

(368) むかし、昔、あるところに、爺さまと婆さまがあったそう。(昔Ⅰ83)

(369) むかし、あるところに爺さんと婆さんがありました。(昔Ⅰ133)

[ガ格名詞の特徴]

この場合、聞き手がまだ知らないのであるから、代名詞など文脈のささえを必要とする語は使われない。「いる」の場合には、そういうものがよく使われる。

(370) 彼が一人甲板の喫煙室にいる時に、(暗146)

(371) 時雄は、其の後に其の男が居るのを夢にも知らなかった。(ふ82)

(372) そして父だけが家にいた。(暗15)(この「父」は特定の人の「父」をあらわしている。)

人名がでてくる場合には、「～という××」という形が使われる。

(373) むかしあるところに塩売長兵衛という人があった。(昔Ⅲ156)

(374) むかし、あるところにたのきゅーという旅の役者があった。(昔Ⅱ168)

(375) むかしあるところになあ、彦市ちゆうえらくとんちな人があったそうだ。
(昔Ⅲ219)

ガ格で文に使われている名詞を次のように五つに分けると、 $a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow d \cdot e$ の順に「ある」が使われる率 $\left(\frac{\text{「ある」}}{\text{「ある」} + \text{「いる」}}\right)$ が大きくなるようである。ただし、「じいさん」「ばあさん」は昔話の形式として「ある」になるものが非常に多い。

a. 規定語のつかない、種をあらわす名詞…………いぬ、さる、ひと、おに

b. 規定語のつかない、性をあらわす名詞…………男・女

c. 規定語のつかない、人の種類をあらわす名詞

年齢で…………年寄り・若者

職業で…………舟大工・かじや

身分で…………殿様・長者

その他…………継母・ほら吹き

- d. 形容詞や動詞などの規定語で属性をしめされた名詞
 形容詞・形容動詞…………若い娘・美しいあねご・無精な若者
 名詞…………年寄りの三太夫・ひとり者の男
 動詞…………芸者をしていた女・袴を穿いた書生・いやがるもの
- e. 「～という」という規定語で名まえを示された名詞
 平六というもの・みけらんという若い男・浦島太郎という人
 つぎに例文をあげる。

a. 種をあらわす

- (376) あるところにさるとかにかがおった。(昔Ⅲ145)
 (377) あるところに熊と兎とがあった。(昔Ⅰ209)

b. 性をあらわす

- (378) むかし, 男がありました。(昔Ⅲ19)

c. 人の種類

- (379) あるところに爺さんがありました。(昔Ⅰ40)
 (380) あるところに名前はわからないけれども一人の若者がありました。
 (昔Ⅱ58)
 (381) あるところに尻っぴり娘があつた。(昔Ⅲ201)
 (382) 昔, ほうろく売りがありました。(昔Ⅲ169)
 (383) 昔あるところに二人の商人がありました。(昔Ⅰ97)
 (384) むかし, あるところに長者どのがありました。(昔Ⅰ15)
 (385) 昔, あるところに継母がありました。(昔Ⅱ145)

d. 規定語のついたもの

- (386) 昔, ひとり者の男がありました。(昔Ⅱ217)
 (387) 昔, あるところにしんしょのよい旦那さまがありました。(昔Ⅱ63)
 (388) 昔, むかし, あるところに拳ほどのこぶのある爺さまが二人ありました。
 (昔Ⅰ90)

e. 「～という」の形のついたもの

- (389) あるところに平六という者があつた。(昔Ⅱ104)
 (390) 昔, ある山寺にずいとんという坊さまがあつた。(昔Ⅲ121)
 (391) あるところに, 馬喰やそ八という貧乏な男があつた。(昔Ⅰ139)

[場所のしめし方の特徴]

(1) 昔話の冒頭の文では「あるところに」のつくものが多い。

(392) 昔、あるところに爺さんと婆さんがあった。(昔Ⅲ181)

(393) むかし、あるところに無精な若者があった。(昔Ⅱ52)

(2) 場所の示されないものもある。

(394) 昔、神主があった。(昔Ⅰ137)

(395) 嘘つきの名人があった。(昔Ⅱ95)

「あるところに」という云い方でなくても、「ある」や「という」がついたりして、聞き手の知らない場所を新しい場面の設定に参加させるものが多い。

(396) ある村に鍛冶屋があった。あるとき、隣村へいったが、(昔Ⅰ173)

(397) 昔、飛驒の沢山というところに、長吉という信心深い正直な炭焼があった。(昔Ⅱ85)

(398) 昔、田山というところに大金持ちがありました。(昔Ⅲ17)

「ある」が使われる場合、2をのぞいて「いる」の場合のように、きわめて具体的な現場が示されることはない。「いる」の場合には、次のようなものがある。

○具体的な場所の示されているもの

(399) 大きな岩の上に婆さまがいて、(昔Ⅱ55)

(400) 座敷にりっぱな白鬚の翁がいて、(昔Ⅰ119)

○具体的な場面の指定のあるもの

(401) それから先の峠に來ると、老翁がまだいました。(昔Ⅱ188)

(402) 私が出て見ると、顔の丸い、緋の羽織を着た、白縞の袴を穿いた晝生さんが居るぢやありませんか。(ふ51)

「ある」が使われている場合、場所が示されていても、その場所は「すみか」であって、「ありか」ではない。

(403) 昔、仙北町にとんてぎ(あわて者)があった。(昔Ⅱ205)

(404) 昔、中村に大作という男があった。(昔Ⅲ223)

〔「聞き手が知らない」ということについて〕

「聞き手がまだ知らない」というのは、話をきかせるという、ふつうの文章の場合であって、質問の文などでは、話し手と聞き手の関係が入れかわる

こともある。

(405) つかんことを伺ふやうですが、斯の根津の向町に六左エ門といふ御大盡があるさうですね。(破117)

4. 一定の属性をもった場所に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合

(325) こんなふの中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、(ふ9)

(409) 田舎にもあんな人があるかと思ふくらい。(あ217)

この場合、「山の中」や「田舎」は場所をあらわしているが、それは特定の位置をもった特定の場所ということに重みがおかれているのではなく、その場所の属性に重みがおかれている。「こんな」というのは、「この」と違って、性格について指示しているのである。

この場合、ガ格の名詞は、3でのべたcとdにかぎられ、その中でもdのほうが多い。cになると「いる」が多く、aやbは「いる」にかぎるのではないかと思われる。

5. 場所を限定せず、あるいは「世間」とか「世の中」というばく然とした広い範囲の中に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合

(407) よくそんな風をしたお役人があるぢやないか。(あ145)

(408) 無人で淋しくて困るから相当の人があったら、世話を^{ぶにん}して呉れ。(こ172)

(409) 斯様な大白痴が世の中に有らうか。(破270)

この場合も「ある」になるのは、ガ格の名詞が3でのべたcとdがほとんどで、aやbはめったにない。そして、やはりdのほうがより多い。

6. メンバー全体の中に、メンバーとしての属性の他に一定の属性をあわせもったメンバーが存在することをあらわす場合

(410) 孫四郎の弟に一人のならず者がありました。(昔Ⅱ80)

(411) 今日の政事家で政論に衣食するものが幾人ありませう。(破189)

(412) 知り合ひの中には、随分骨を折って、教師の職にありつきがってゐるものがある。(こ114)

(413) 以前師範校の先生で猪子といふ人が有った。(破119)

メンバー全体という範囲を、「～の中に」とか「～で」とか「～に」とかで示している。

この場合、「ある」が使われるガ格の名詞は、3でのべたcとdに、さらにeが加わる。この資料ではdとeが多かった。aとbは「いる」になる。なお、「人間には、男と女がある」のようなものをいれると、a、bにまでひろがるだろう。

7. 組織体の中に、一定の属性をもった人や動物が存在することをあらわす場合

(328) 新左衛門という家にあんにゃ(兄), おじ(弟)三人の若者があった。(昔Ⅲ131)

(414) ある山寺に和尚がいた。(昔Ⅱ110)

(415) 山本の家には(中略)年寄の三太夫がいた。(暗236)

(416) 古家に引きとられていった。そこには祖父のほかに、お栄という二十三四の女がいた。(暗9)

組織を構成しているメンバーの一人として存在することを意味していて、タダイマそこに居なくてもよい。

5・6・7は、存在の場所が空間でない。その意味で、存在の仕方が抽象的だといえる。そして、これらは、所有のカテゴリーに比較的近いのではないかと思われる。

次のような例は、所有と5・6・7の中間に位置するのではなからうか。

(417) この際伸子が彼らの手元にゐないのを遺憾とすること。(伸133)

(418) お前を啓発してくれる人がありさへすれば。(伸151)

(419) 私も, 一世話して呉れるものが有まして一家内を迎えました。(破184)

以上のべてきた1から7まではすべて、人間・動物以外をあらわす名詞と組みあわさる場合といっしょにして、統一的に扱うことができる。

これについては、まとめの表で示す。

まとめ

以上のべてきたことは、次のような表にすることが出来る。(別表)

補注

この報告は、昭和41年度に言語効果研究室(当時の編成による)において、室長高橋の指導のもとに、研究補助員屋久がおこなった調査によるものであ

る。昭和42年3月に、「言語効果研究室41年度研究補助員研修報告書〈ガ格の名詞と組みあわせる「ある」の用法——(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い——〉」としてガリ版ずり47ページの報告プリントをつくり、また、その一部を「昭和41年度国立国語研究所年報18」(115～119ページ)に引用した。その後、需要が多く、プリントも出つくし、国立国語研究所日本語教育映画解説4「基礎篇第四課 くきりんはどこにいますか——「いる」「ある」——」(1979)に「屋久茂子1967は、すべて小説類からのものであるが、用例が豊富で、「ある」「いる」の用法整理には便利である。ただし市販されておらずほとんど手に入らないだろう。」と書かれたりして、活字化をもとめる声がつよくなったので、高橋との連名で、この報告書にのせることにした。

17年まえのもので、修正の余地もあるが、屋久がすでに退職しており、また、もとのままでも、要望にこたえることができると判断したので、二三の例文をとりかえるだけで、そのまま報告することにした。なお、題名だけは、〈「～がある」の用法〉にかえた。これは、その内容が、名詞と動詞の組みあわせを論ずる連語論の範囲をこえていたからである。(高橋記)

ガ格の名詞と組みあわせる「ある」の用法一覧

		人・動物以外		人・動物			
		あ	る	あ	る		
I	空間的存在	ありか	あるところに 属性の示された場所	すみか	29. 卒業生の写真が <u>学校</u> にある。 63. <u>前の島</u> に造船所がある。 71. <u>左手に高く</u> 麦畑があつて 73. <u>西向きの窓</u> にはまだ陽があつた。	379. <u>あるところに</u> 爺さんがありました。 325. <u>こんな山の中にもこんなハイカラの女</u> があるかと 404. <u>中村に大作</u> という男があつた 328. <u>新左衛門</u> という家に三人の若者があつた。	399. <u>大きな岩の上</u> に婆さまがいて 401. <u>それから先の峠</u> に来ると老翁がまだいました。 ○この島に人がいるはずがない。 4 それとその家の女中がそこにいた。 ○ある田舎に爺さんと婆さんがいました。 ○こんな田舎にあんな人がいるなんて、 ○お前がそうして尾道にいる以上 415. <u>山本の家</u> には年寄の三太夫がいた。
					すみか	地名 家庭	
II	範囲・わくぐみの中の存在						
	1. 社会的・心理的存在 2. 関係的存在 3. メンバーとしての存在 4. 場所無限定の存在 5. 付属的存在 6. 慣用的存在	イ. へだたり ロ. つながり	12. 士農工商の四つの階級があつた。 87. <u>此姉とKの間</u> は大分年齒の差があつた。 90. <u>彼大靈と自分との間</u> に関係があつて 96. <u>私の手に入れたもの</u> に「 <u>鵲屋春琴伝</u> 」という小冊子があり 102. <u>是程悲しい情愛</u> がありませんか。 108. <u>請う腕より始めよ</u> ということがある 112. <u>この老婆に對する</u> と言つては語弊がある。 121. <u>坐つていて</u> そんな事の知れよう筈がありません。		327. <u>そのなかに</u> 一人まだ若い男があつた。 326. <u>アンナのような女</u> がもしあつたなら	○そのなかには女が一人いる。 ○馬鹿な女がいたものだ。	
III	A. 1. 事件・出来事「こと」 2. 行事 3. 連絡の成立 4. 状態 B. 1. 行為・作用 ロ. 時を媒介 ハ. 人を媒介		137. <u>汽車に故障</u> がなつてな、 145. <u>是は万一の事</u> がある場合でなければ 18. <u>きょう四時から東海寺</u> で法事があるんだ。 151. <u>橋本という友だち</u> からのたよりがあつた。 166. <u>東京と備中との間</u> に手紙の往復があつて 171. <u>選挙人の感情</u> を害するようなことが有つては 172. <u>夜中から急に晴れ渡つた夜</u> があつた		347. <u>伸子は父と、客</u> があつて階下の広間にいた。 322. <u>今夜はわしのところ</u> には来客があつて 357. <u>一時頃、御免なさいと玄關</u> に来た人がある。		
IV	1. 所有物としての存在 2. 他に対する働き 3. 時間	(1) (2) (3) (4) (1) (2) (3)	188. <u>彼は東京に家</u> がある。 22. <u>この机</u> には足が四本ある。 201. <u>瀬川君は生徒間</u> に人望がありますか 229. <u>顔は仔細</u> があつて人には見せない。 206. <u>竜岡には普気質</u> がある。 190. <u>佃の聲</u> にも優しさがあつた。 191. <u>おい、君</u> にちょっと話がある。 272. <u>佃との生活</u> に十分未練があつた。 193. <u>湿度は温度</u> と関係があります。 21. <u>佐々さん、あなた</u> これから時間がありますか。		329. <u>お月さま</u> にひとり娘があつた 336. <u>細君も芳子に恋人</u> があるのを知つて	344. <u>貴方にはお秀さん</u> という人がいる。	
V	経験としての存在	イ. ロ.	25. <u>君は恋をした事</u> がありますか。 309. <u>僕の生涯</u> は、実に種々なことが有りました。				